［研究論文］

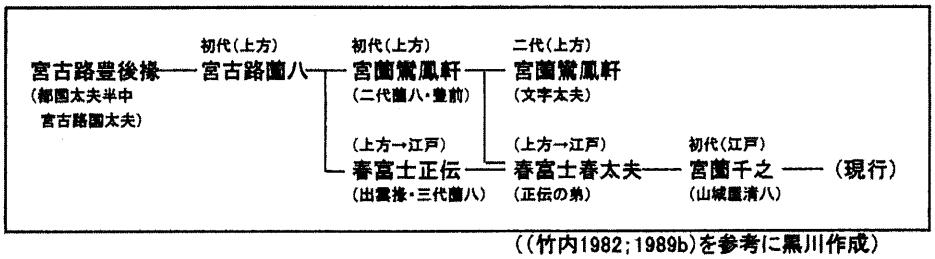
宮古路節太夫の改名と正本版元の係争—宝暦12年(1762)を中心に—

黒川　真理恵

1. はじめに

近世期上方においては、浄瑠璃は、人形芝居に出演する義太夫節と、歌舞伎に出演する歌浄瑠璃に大別された（角田1989：528)。歌浄瑠璃の太夫（語り手）である宮古路豊後掾は、享保19年（1734）に江戸へ下ると、多くの劇場に出演し、道行景事の場面で浄瑠璃を語った。豊後掾が語る浄瑠璃は、国太夫節または豊後節とも呼ばれ、大流行となった。しかし、心中道行を題材としていたことから、良俗に反するとして弾圧禁止された。江戸では、豊後掾の門弟らによって、常磐津節、富本節、清元節へと分派した。上方では、豊後掾の門弟の初代宮古路薗八によって、宮古路節として継承され、さらにその門弟の宮薗鸞鳳軒によって継承された。【図1】は宮古路節の略系譜である。

【図1】宮古路節略系譜



((竹内1982;1989b)を参考に黒川作成)

浄瑠璃の太夫は、特定の版元と提携関係を結び、その版元から、自身が作詞・監修した正本を出版した。黒川（2011；2012a；2012b）では、宮薗鸞鳳軒の正本を出版した版元の阿波屋一統に着目し、その出版活動を解明することを試みてきた。黒川（2012a）においては、鸞鳳軒の正本の版権をめぐる版元間の係争を取り上げ、曲別による版権の形態を示唆した。阿波屋は、宮古路節正本の旧来の版元である美濃屋平兵衛との係争を繰り返しており、『京都書林仲間記録』（宗政；朝倉1977～1980）（彌吉1988;1992）によると、宝暦13年（1763)、明和3年（1766)、明和9年（1772）の少なくとも三回は係争の記録がみられた。

鸞鳳軒は、はじめ二代宮古路薗八を名乗っていたが、宝暦12年（1762）に宮薗豊前へ改名し、明和3年（1766）に宮薗鸞鳳軒へ改名した。宝暦13年と明和3年の係争が、鸞鳳軒の改名の時期と重なっていることから、太夫の改名と正本版元の係争には、関連があることが推察される。したがって、本論文では、鸞鳳軒が最初に改名した宝暦12年に焦点を当て、阿波屋と美濃屋との係争を事例に、太夫の改名と正本出版との関連について明らかにすることを目的とする。まず、第二節で、宝暦期における宮古路節太夫の改名について述べ、第三節と第四節では、宝暦12年以降の美

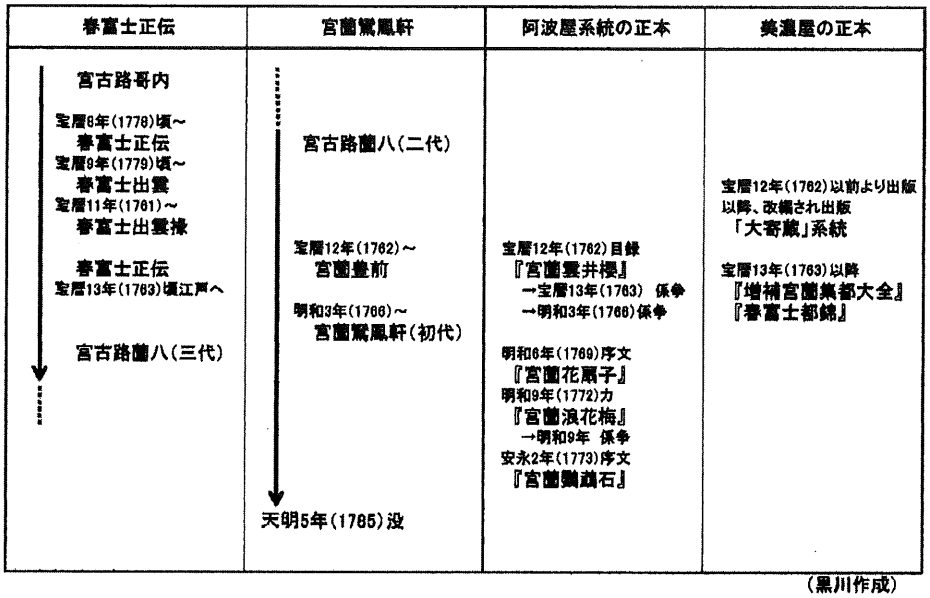
濃屋と阿波屋のそれぞれの動きを検証する。

なお、本論文では、宮薗鸞鳳軒については鸞鳳軒の名称で統一するが、場合によっては豊前（鸞鳳軒）と表記し、初代鸞鳳軒を指すこととする。また、宮古路節は、鸞鳳軒が「宮古路」から「宮薗」へ改姓した宝暦 12 年以降、宮薗節とも称したが、本論文では宮古路節と総称する。

2. 宝暦期における宮古路節太夫の改名

宮古路節の伝承状況については、次のような先行研究がある。年代順に、黒木勘蔵（1929）、野間光辰（1931）、秋葉芳美（1934a；1934b）、郡司正勝（1959）、藤根道雄（1964）、倉田喜弘（1973）、竹内道敬（1982；1989a；1989b）、根岸正海（2002）である。初代宮古路薗八の弟子には、宮薗鸞鳳軒のほか、春富士正伝（出雲）がいた。藤根道雄（1964）および竹内道敬（1982）によると、春富士正伝は鸞鳳軒の兄弟子であり、両者は師匠である初代宮古路薗八の後継をめぐり競い合っていた。【図２】は、太夫の改名と正本出版の時期を表したものである。正伝と鸞鳳軒は、宝暦期以降、たびたび改名し、それぞれ正本を出版していた。

【図2】 太夫の改名と正本出版



（黒川作成）

春富士正伝は、宝暦 8 年（1778）頃から正伝を名乗り、宝暦 9 年（1779）頃から出雲に改名し、宝暦 11 年（1981）には掾号を受領し出雲掾と名乗った。しかし、宝暦 13 年（1763）頃には再び

正伝に戻り、上方から江戸へ拠点を移した。その後、三代宮古路薗八を名乗ったとされている。西山松之助（1982）によると、掾号とは技芸者へ与えられた名誉称号であり、本来は勅許だったが、のちに五摂家級の公家から出されるようになった。近世期においては、浄瑠璃太夫の名誉称号として受領されることが多かった。

それに対し、鸞鳳軒は、はじめは師匠の名前である二代宮古路薗八を襲名していたが、宝暦 11 年に出雲が掾号を受領すると、翌宝暦 12 年に宮薗豊前へ改名した。「宮薗」は、宮古路の「宮」と薗八の「薗」を組み合わせたもので、師匠の名前をもとにしつつ、独自の流派を築こうとした鸞鳳軒の姿勢がうかがえる。鸞鳳軒自身は劇場には出演せず、多くの門弟を抱え、劇場には門弟が出演した。上方においては、鸞鳳軒とその一門が勢力を拡大し、正伝は翌宝暦 13 年に江戸へ下ることとなった。

美濃屋平兵衛は、宝暦 12 年以前から宮古路節正本の『宮古路大寄蔵』を出版していたが、宝暦 13 年以降も改編して出版を続けた。美濃屋は『増補宮薗集都大全』と『春富士都錦』も出版しており、いずれも目録には「宝暦十三未年改正」と記されている。このことから、美濃屋にとっても、宝暦 13 年が分岐点となっていたことが推察される。

3. 宮薗鸞鳳軒の改名と美濃屋平兵衛の動き

宝暦 12 年（1762）、それまで二代宮古路薗八を名乗っていた鸞鳳軒は、宮薗豊前へ改名した。その際に、阿波屋から出版した正本が『宮薗雲井櫻』である。版元は大坂の阿波屋平八で、京出店として阿波屋七兵衛が関わっていた。目録には「宝暦十二年十一月吉日　宮薗豊前直伝」と記されている。序文には「太夫　宮薗豊前」以下、主な門弟 11 名の名前が記されている。門弟には、「宮薗美濃太夫／宮薗大和太夫／宮薗内匠太夫／宮薗文字太夫／宮薗八十太夫／宮薗湊太夫／宮薗鐘太夫／宮薗兵庫太夫／宮薗相模太夫／宮薗政太夫／宮薗繁太夫／宮薗家太夫」がいた。

翌宝暦 13 年（1763）、美濃屋は、阿波屋が「宮薗浄るり本」の「重板」をしたとして訴えを起こした。

（『京都書林仲間記録』第 5 巻「上組済帳標目」181 頁（彌吉 1988：281-282））

宝暦十三年未正月より五月迄

一　宮薗浄るり本之一件、押小路高倉西へ入阿波屋七兵衛、並大坂心斎橋五丁め阿波屋平八と当地みのや平兵衛、並夷講連中、重板訣並家元之義、行事より書上候写、大坂行事より上り申候書状、阿波屋平八行事へ口上、宮薗豊前仲ヶ間へ挨拶相頼候ニ付、御窺書、浄るり御裁配書、浄るり目録書、又御窺書両通、裁配之趣書上候写、御済状、余り本返書、みのや平兵衛書上留書

黒川（2012b）では、美濃屋の『大よせ蔵』と、阿波屋の『宮薗雲井櫻』『宮薗浪花梅』『宮薗鸚鵡石』を比較し、阿波屋が美濃屋に無断で鸞鳳軒の曲を出版したことが「重板」として問題となっ

たことを示した。係争の結果、宝暦 12 年以前より『大よせ蔵』に収載されていた曲については、美濃屋が専売権を持ち、それより後の曲については阿波屋に専売権が認められるようになったことを結論付けた。しかし、黒川（2012b）では、美濃屋の動向については詳しく論じることができなかったため、本論文において再度検証することとする。

美濃屋は、宝暦13年以降、それまでに出版していた複数の宮古路節段物集を改編して出版した。本論文では、それらの中から『大よせ蔵』『増補宮薗集都大全』『春富士都錦』の三冊を分析対象とする。『大よせ蔵』については国立国会図書館本（京 389）、『増補宮薗集都大全』については國學院高等学校藤田・小林文庫本（98/1/143）、『春富士都錦』については『日本歌謡集成』第10巻（高野 1961：159-237）の翻刻を用いることとする。

（1）『大よせ蔵』（国会図書館（京 389））

根岸正海は、美濃屋の段物集を「大寄蔵系統」と名付け、そこに記された太夫の改名の時期をもとに、次のように出版年代の特定を行っている（根岸 2002：132）。上野学園本と早稲田大学演劇博物館本の『大よせ蔵』には、「宮古路薗八直伝」と記されていることから、鸞鳳軒が薗八を名乗っていた宝暦12年以前に出版されたとしている。それに対し、国会図書館本の『大よせ蔵』には、「宮薗豊前直伝」と記されていることから、鸞鳳軒が豊前を名乗っていた宝暦13年から明和3年までに出版されたとしている。

『大よせ蔵』には、46 曲が収載されているが、このうち、内題下に作者名が明記されているのは、「宮古路豊後」2曲、「春富士出雲（正伝）」4曲、「宮薗豊前（鸞鳳軒）」10曲である。

（2）『増補宮薗集都大全』（藤田・小林文庫（98/1/143））

前述の通り、『増補宮薗集都大全』の目録には、「宝暦十三未年改正」とあり、宝暦13年以降に改正されたことを示している。44 曲が収載されており、内題下の作者名には「宮古路薗八」または「宮薗　　直伝」とある。「宮薗　　直伝」は、「宮薗豊前直伝」の名前の部分を削って収載したものである。

（3）『春富士都錦』（『日本歌謡集成』第10巻（高野 1961：159-237））

『春富士都錦』にも、「宝暦十三未年改正」とあることから、宝暦 13 年以降に改正されたことを示している。「春富士正伝直伝」とあり、春富士正伝の曲を中心に42曲が収載されている。

【表1】は、阿波屋の『宮薗雲井櫻』（國學院高等学校藤田・小林文庫 517/1/165）の収載曲一覧である。右列に、美濃屋の『大よせ蔵』ならびに『増補宮薗集都大全』との重複の有無を示した。『宮薗雲井櫻』には、全部で45曲が収載されているが、6曲を除く、39曲が『大よせ蔵』と『増補宮薗集都大全』のどちらかまたは両方と重複して収載されていた。

【表1】『宮薗雲井櫻』　（藤田・小林文庫 517/1/165）

	内題 語り出し	内題下	『大よせ歌』	『集郁大全』
1	祝言はつ子の日 「そも〳〵年始の御いわひ			
2	記言恋の初嵐 「かほりくるむめがしらはにさくらのえくぼ	宮薗豊前掾直伝		○
3	道行思ひのたき恋のうつりが 「げにやばんしんのいわをがゝとして			○
4	乱顔鶴移香 「かすがのゝゆきまをわけておひ出くる	作者　宮薗豊前直伝		○
5	雪姫名園の段 「入あひのかねもかすみにうづもれて	宮薗豊前掾直伝		○
6	物狂ゆかりの十番 「たどりゆくむもみだれかせいとの	宮薗豊前直伝		
7	辰五郎あつま　道行舞はがい 「月と花とは同じながめでも		○	○
8	道行故郷の名殘 「あだあらしつきにさへぎるくもまのいろ	宮薗豊前直伝		○
9	楠久千代の若緑　みちゆき 「たどりゆくいまはむもみだれ候		○	○
10	名殘の鶴尽 「はしりがきうたひのほんはこのありう		○	○
11	道行歌の中山 「こひといふ字はさくらの花よ	作者　宮薗豊前直伝		○
12	彦三　小きん　恋のたばね木 「よの中の人をつほみのさかりのと	宮薗豊前直伝		○
13	道行夢の芥川 「かすがのゝ若むらさきのすり衣	宮薗豊前直伝	○	○
14	寿の門松 山崎与次兵衛　鶴蔵あづま　道行 「あづまうけだせやまざき与次兵衛		○	
15(1)	うすゆき姫道行 「たび立に目のよしあしをえらはぬは			○
15(2)	えもん道行 「かみならぬ身のぜひもなや			○
16	雙子隅田川　きやう女道行 「はるもくるそらもかすみのたきのいと		○	
17	おはな半七　刀鮓月　道行浮名下り船 「いくよ／＼のうきつとめ		○	
18	道行雪集衾 「おしどりのよるのふすまもあれはてゝ	宮古路豊八直伝		○
19	おさん茂兵衛　道行そでびやうぶ 「しるしらぬよのとりさたもあしにさき	豊八直伝		○
20	梅野由兵衛　道行雲のたまよばひ 「よの人のそのあらましはかすならで		○	
21	伊左衛門夕ぎり ゆかりの月見　くぜつの段 「すぎしよすがのつれ引ま		○	○
22	前六福巻　鶴の嶋口舌の段 「入雅にちる山寺のかねに又	作者　宮薗豊前直伝		○
23	名殘の姿見 「くろかみのみだれて今のうき思ひ	宮薗豊前直伝	○	○

	内題	内題下	『大よせ歌』	『集郁大全』
24	おまん源五兵衛　雛物の段 「しらいとのむかしがましじやなまなかに	宮薗豊前直伝		○
25	細帯借座敷の段 「なつきにけらし散花も	宮古路豊八直伝	○	○
26	半兵衛小いな　口舌八景尽の段 「なま中にあひも見もせぬその内は	作者　宮薗豊前直伝	○	○
27	姫絵御前　左衛門藤　遠夜の爪琴 「あとにはひとりこしかたを	宮薗豊前直伝		
28	与古高崎　娘情吉原後　うれいのだん 「むめははなはだあをくやせ		○	
29	山崎与次兵衛　ふじやあづま 在所かごの段 「暮渡り雁の数よむ鏡月		○	
30	山崎与次兵衛舞茸の段 「おきく／＼とよぶこえは		○	
31	やすな　くずのは　信田の愛別 「たれにとひたれにとはましいはくずの	宮薗豊前直伝		○
32	信夫の首懸の段 「よき人はよきことばかりいやしきに	宮薗豊前掾直伝		○
33	雅楽の袖袂 「かこひの内へ入かげを	宮薗豊前直伝		
34	三かつ半七　長町の段 「すむ所さへながまちと	宮薗豊前直伝		○
35	姿のうつし絵 「はやさかづきもひきしほに		○	○
36	源の玉くしげ 「立かへる一合取てもぶしはぶし	宮薗豊前直伝		○
37	重井筒　ゐけんのだん 「ふさはそれ共しらかみの		○	
38	丹波与作 「おそばのしうにはやされて	宮薗豊前直伝		○
39(1)	長柄の人柱　星玉子源の八文字 「つのくにのとちは上ぼんよしやうの		○	○
39(2)	星玉子源八文字　おこよの段 「はゝは見おくりめになみだ		○	○
40(1)	迎雪鶴門筑紫嶺 「いんとくあればやうほう有	宮古路豊八		
40(2)	かうや山のだん 「ゆくそらのいたはしやいしどう丸		○	○
41	鳳呂屋の段 「うきこともよに有ときはいたづらと	宮薗豊前掾直伝		
42	前ばなしの段上巻の内 「けぞふせし女のもとへかよひしあくたがは	作者　宮薗豊前直伝		○
43	四つの袖うたの段 「うき中のならひはこひのみちしばが	直伝	○	○
44	角内おなべ　鏡の徳似合 「あとにはといきをつく／＼と	宮古路豊八直伝		○
45	不心底開鮑 「もにすまぬあはびのかひの人がらと		○	○

（黒川作成）

宝暦 12 年 11 月、豊前（鸞鳳軒）は改名するとともに、それまで正本を出版していた美濃屋ではなく、阿波屋から『宮薗雲井櫻』を出版した。しかし、【表1】で示した通り、『宮薗雲井櫻』は

そのほとんどが美濃屋からの流用だった。そこで、それまで専売権を持っていた美濃屋は、「重板」として本屋仲間に訴えを起こした。その結果、宮古路豊後と鸞鳳軒の旧来の曲は、それまで通り美濃屋から出版されることが認められたが、鸞鳳軒の新作の浄瑠璃は阿波屋から出版されることとなった。

美濃屋は、自らが出版した正本の冒頭に、別の正本を宣伝するための「惣目録」を掲載していた。【図3】は、「惣目録」を翻刻したものである。この「惣目録」は、同様の形式のものが『宮古路大寄蔵』（乙）（竹内道敬文庫 03-1028）、『増補宮薗集都大全』（藤田・小林文庫（98/1/143））、『春冨士都錦』（『日本歌謡集成』第 10 巻（高野 1961））、『宮古路大見台』（竹内道敬文庫 03-1029）に掲載されている。内容は、「音曲東西丸」「宮古路大寄庫」「宮古路大見臺」「宮古路段物揃」「春冨士都錦」「宮薗都（ママ）大全」「宮古路今様手綱」のそれぞれの広告である。

【図3】美濃屋版　宮古路節正本惣目録

惣　目　録

一、音曲東西丸　是は竹本豊竹両家の道行景事大寄
一、宮古路大寄庫　是は国太夫物諸流の一段物不残集尤無漏事
一、宮古路大見臺　是は大よせくらにもれたる道行景事を集む
一、宮古路段物揃　是は国太夫諸流の段物或は道行景事を集む
一、春冨士都錦　是は春冨士正伝直正本段物道行景事大寄
一、宮薗都大全　是は宮薗直伝章句を以道行景事不残集む
一、宮古路今様手綱　是は宮古路綱太夫直伝の道行景事大寄

右諸流太夫直伝正本也近頃紛敷類板流布仕候所此度吟味の上
相改出し申候尤新作物段物みちゆきけい事等何によらず抜さし仕
入替御望次第自由仕候其外何によらず段物みち行景事御けいこ本御求可被下候

（（高野 1961:161）を参考に黒川翻刻）

「惣目録」の左側の欄には、「近頃紛敷類板流布仕候所此度吟味の上相改出し申候」という一文があり、「近頃紛らわしい類板が流通しているため、このたび改正して出版した」ということを示

している。「惣目録」が宝暦 13 年以降に作成されたとするならば、この一文は、阿波屋ならびに豊前（鸞鳳軒）に対する、美濃屋からのメッセージだったのではないだろうか。

美濃屋は、阿波屋の『宮薗雲井櫻』で正本を流用されてしまったが、自らの正本の正当性を主張することによって、『宮古路大寄蔵』や『宮薗集都大全』を出版し続けた。その際、鸞鳳軒の曲については、改名するたびに、詞章の内題下の作者名を「宮古路薗八」から「宮薗豊前」「宮薗鸞鳳軒」へと改めた。そして、鸞鳳軒以外の太夫の曲については引き続き専売権を持ち、春冨士正伝については『春富士都錦』、宮古路綱太夫については『宮古路今様手綱』として正本を出版した。

4. 宝暦 12 年以降の宮薗鸞鳳軒と阿波屋の動き

宮薗鸞鳳軒は、宝暦 12 年の改名以降、新作の浄瑠璃を発表し、正本を出版した。代表的な正本に、『宮薗花扇子』（明和 6 年（1769）序）、『宮薗浪花梅』（明和 9 年（1772）カ）、『宮薗鸚鵡石』（安永元年（1773）序）、『宮薗新曲集』（安永 3 年（1774）跋）がある。『宮薗浪花梅』の一部を除き、これらの正本には、美濃屋の正本と重複する曲は収載されていない。

（1）『宮薗浪花梅』（京都大学　国文 Ks/15）

大坂の森川豊助と阿波屋平七によって出版された。『宮薗雲井櫻』『宮薗浪花梅』『宮薗鸚鵡石』の奥付には、共通の識語が記されている。

（2）『宮薗花扇子』

国会図書館本（111-350）には「本取次所」として京都の中川金治と大坂の阿波屋太三郎の名前が記されているが、竹内道敬文庫本（甲）（03-1026）には「本おろし所」として京都の玉屋久次郎の名前が記されている。阿波屋がどの程度出版に関与していたかは、現時点では判断することはできない。

（3）『宮薗新曲集』（『日本歌謡集成』第 10 巻（高野 1961：145-158））

鸞鳳軒の短編の浄瑠璃を集めたものである。京都の浅井庄左衛門、野口治郎兵衛、中川金治によって出版された。鸞鳳軒は、長編の浄瑠璃については阿波屋から出版し、短編については中川金治らから出版したのだろう。

（4）『宮薗鸚鵡石』（国会図書館 111-351）

京都の阿波屋定次郎によって出版された。鸞鳳軒の門弟一覧が掲載されており、60 名以上の門弟の名前が記されている。門弟が増えるたびに、書き加えられて出版された。門弟が稽古のために「鸞鳳軒直伝」の正本を購入したために、鸞鳳軒と提携関係を結んだ阿波屋は、多くの利益を得ることとなった。鸞鳳軒にとっても、美濃屋から阿波屋へ変更することにより、正本の出版に自らの

意向を大幅に反映させることができるようになった。『宮薗鸚鵡石』は、門弟一覧のほか、見返しや目録に挿絵を入れた豪華な装丁となっており、鸞鳳軒一門の隆盛を象徴したものとなっている。

宝暦12年の改名によって、鸞鳳軒は、門弟を引き連れて独立し、門流を拡大することに成功した。一方で、鸞鳳軒の兄弟子の春富士正伝は、宝暦13年以降、上方を離れ、江戸へ拠点を移すこととなった。宝暦12年の鸞鳳軒の改名が、上方における正伝と鸞鳳軒との勢力争いに大きな影響を及ぼしたといえる。

なお、天明5年（1785）に鸞鳳軒が京都で没すると、文化2年（1805）に高弟の文字太夫が二代鸞鳳軒を襲名した。しかし、文化9年（1812）に二代鸞鳳軒が大坂で没した後は、上方での伝承は途絶えた。現在は、正伝の弟で、鸞鳳軒の門弟の春富士春太夫が、寛政4年（1792）頃に江戸へ下った際に伝えた10曲のみが伝承されている。

阿波屋は、出版界においては新興勢力だった。阿波屋にとって、鸞鳳軒と提携関係を結ぶことは、出版界に参入し、浄瑠璃本の分野で基盤を築く絶好の機会だった。阿波屋は、明和期の一時期、義太夫節の正本出版にも参入を試みている。義太夫節の正本は、元来、劇場と提携関係にある版元によって独占的に出版されていたが、明和2年（1765）8月に豊竹座が退転すると、有力太夫の一人であった豊竹島太夫の正本を、阿波屋が出版するようになった（児玉 1991：88）。阿波屋が出版に関わった期間は、明和5年（1768）～安永元年（1772）である。江戸の鱗形屋孫兵衛との連名で、森川豊助、阿波屋太三郎、阿波屋平七のそれぞれが関わった。おそらく、豊竹座が退転したことで、正本の出版体制に隙間が生じ、阿波屋は島太夫とのつながりを持つことにより、義太夫節の正本出版に参入しようとしたのだろう。しかし、安永4年（1775）以降、島太夫は京都へ拠点を移し、阿波屋は義太夫節の正本出版から退くこととなった。

さらに、明和5年正月、阿波屋平八は、大坂市中であった打ちこわし事件を描いた絵草紙を出版し、このことによって翌明和6年正月に大坂追放処分となった。平八は、阿波屋一統のなかでは初期の版元で、前述の通り『宮薗雲井櫻』の出版を行った版元である。平八の追放後は、太三郎によって本屋株が引き継がれた。この一件について、今田洋三は、旧来の版元と新興勢力との争いを示す一例として述べている（今田 1989）。このような状況のなかで、阿波屋は、鸞鳳軒をはじめ浄瑠璃太夫との直接的なつながりを持つことで、出版界における基盤を築こうとしたのだろう。

5. おわりに

本論文では、宝暦12年の宮薗鸞鳳軒の改名に焦点を当て、正本出版との関連について考察した。鸞鳳軒は、宝暦12年に改名独立したものの、すべての曲を新作として出版するには至らず、従来の曲を流用しながら、徐々に新たな曲を増やしていった。鸞鳳軒と阿波屋との新たな提携関係は、旧来の版元であった美濃屋との間に軋轢を生じることとなり、美濃屋の「惣目録」の文言からは、

阿波屋ならびに鸞鳳軒との対立構造を読み解くことができた。鸞鳳軒とその門弟は、上方において勢力を拡大していったが、阿波屋と美濃屋との新旧版元間の対立を巻き込みながら進行していったといえるだろう。

参考文献

秋葉　芳美

1934a　「薗八節雑話」上方郷土研究会（編）『上方』40：48-55.

1934b　「薗八節雑話（続）」『上方』41：57-63.

市古　夏生（編）

2010　『江戸文学　第42号　版権と報酬』東京：ぺりかん社.

倉田　喜弘

1973　「初代宮薗鸞鳳軒のこと」財団法人古曲会（発行）『古曲』14：6-9.

黒川　真理恵

2011　「近世上方書林阿波屋一統の出版活動について―宮古路節正本を中心に―」『東洋音楽研究』76：25-47.

2012a　「宮薗鸞鳳軒の段物集の出版をめぐる太夫と版元の関係―宮古路節正本版元の抗争―」『お茶の水音楽論集』14：1-12.

2012b　『近世上方書林阿波屋一統の出版活動について―宮古路節正本と「はやりうた」の唄本を中心に―』平成23年度 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士論文.

黒木　勘蔵

1929　「薗八節の研究」『近世演劇考説』東京：六合館.

1943　「薗八節の研究」『近世日本芸能記』東京：青磁社：348-406.

郡司　正勝

1959　「薗八節追考」『かぶきの発想』東京：弘文堂：216-245.

1978　「薗八節追考」『かぶきの発想』東京：名著刊行会：216-245.

神津　武男

2009　『浄瑠璃本史研究：近松・義太夫から昭和の文楽まで』東京：八木書店.

児玉　竜一

1991　「演博所蔵　近松没後浄瑠璃本奥書調査報告」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館紀要『演劇研究』15：81-94.

今田　洋三

1989　「大坂出版界の形成と発展」新修大阪市史編纂委員会（編）『新修大阪市史』第3巻　大阪市：990-1031.

高野　辰之（編）

1929　『日本歌謡集成』第10巻　初版　東京：春秋社.
1961　『日本歌謡集成』第10巻　改訂版　東京：東京堂出版.
竹内　道敬
1982　「正伝節研究ノート」『近世芸能史の研究』東京：南窓社：120-142.
1989a　「『宮古路月下の梅』諸本考」『近世邦楽研究ノート』東京：名著刊行会：162-180.
1989b　「宮薗節」平野健次；他（監修）『日本音楽大事典』東京：平凡社：533-534.
竹内　道敬；根岸　正海（編）
1989　『竹内道敬寄託文庫目録（その一）宮古路節の部』東京：国立音楽大学附属図書館.
1997　『竹内道敬寄託文庫目録（その八）追加編（一）』東京：国立音楽大学附属図書館.
角田　一郎
1989　「上方浄瑠璃」平野健次；他（監修）『日本音楽大事典』東京：平凡社：528.
長江（渡辺）浩子
2010　「18世紀上方三味線音楽界における宮古路系浄瑠璃」
藤井知昭；岩井正浩（編）『音の万華鏡　音楽学論叢』東京：岩田書院：133-145.
西山松之助
1982　『家元の研究』東京：吉川弘文館.
根岸　正海
2002　『宮古路節の研究』東京：南窓社.
野間　光辰
1931　「二代目宮薗鸞鳳軒に就て」『上方』4：18-21.
平野　健次
1989　「家元」平野健次；他（監修）『日本音楽大事典』東京：平凡社：169-172.
藤根　道雄
1964　『豊後系の浄瑠璃』レコード解説、ビクター.
1974　「豊後系の浄瑠璃」『藤根道雄遺稿集』東京：藤根道雄遺稿集刊行会.
宗政　五十緒；朝倉　治彦（編）
1977～1980　『京都書林仲間記録』第1巻～第6巻　東京：ゆまに書房.
彌吉　光長
1988　『未刊史料による日本出版文化　第1巻　出版の起源と京都の本屋』東京：ゆまに書房.
1992　『未刊史料による日本出版文化　第7巻　京都出版史料補遺』東京：ゆまに書房.

くろかわ　まりえ
お茶の水女子大学大学院博士後期課程修了。博士（人文科学）。現在、東邦音楽大学、お茶の水女子大学大学院非常勤講師。